
思い出が見える丘

大樹の心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出が見える丘

【Nコード】

N0627Y

【作者名】

大樹の心

【あらすじ】

いつも失敗ばかりの小学6年生の男の子。その男の子や友達達の純粹すぎる『恋愛感情』や、ぶつかり合う『友達関係』を1年間に起こる様々な出来事や冒険で描くストーリー。給食・避難訓練・授業・登下校・夏休み・打ち上げ花火・運動会・卒業式・・・いろんな懐かしいエピソードに引き込まれます。難しく考えないで素直にのんびりゆったりほのぼの読み進めて下さい。うぶでくすぐったいテレのある恋愛と友情に『ときどき』や『感動』を味わえるはずですよ。

1、通学路

寝ぼけた頭・・・髪の毛には寝癖がついている。ボーっとして目を開けるのもめんどくさい・・・・・・・・

カチャッ

家からでると、外には元気すぎる太陽が力いっぱいに輝いていた。

今は朝の7：30、学校へ行く時間。楽しい事とか嫌な事・・・・・・いろんな事が始まる1日のスタートだ。僕は大きな伸びをしながらいつもの通学班の集合場所に目を向けてみた。そこにはもう友達みんなが全員揃っていて、集合時間になってもこない僕の事を、いらいらしながら待っているのが見えた。

「ごめんごめん！遅れちゃった・・・・待った？？（にが笑）」

いつも朝の集合に遅れてしまう僕。今日もいつも通りに、みんなの機嫌を取る得意のになが笑いで言った。それを聞いた通学班の班長、のぶ君が・・・

「遅いよ！きよちゃん！！もうずっと待ってるんだよ！！」

と少し怒りながら僕に言ってきた。

同じクラスなのぶ君。僕にとって1番の親友だ。僕達2人は、「小学校生活のどんな時でも一緒にいた」と言えるくらいの仲良し。学校に行く時も一緒、授業の間の5分間休みも一緒。長い休み時間でも一緒だし、帰る時も一緒に帰る。もちろん学校が終わってから

も、2人で一緒に遊んでいた。のぶ君は僕にとって一番大切な親友であつて、僕の憧れの存在でもあつた。

のぶ君はとにかく何でも得意。やる事全部で、いつも1番になっていた。どんな遊びをやる時も、どんなスポーツをやる時も、もちろん勉強でもいつも僕より上手だった。必ず1番がのぶ君で、2番が僕。小学6年になるまでのこの5年間、ずっとそんな関係が続いている。もちろんそれは通学班でも同じ。僕がずっと憧れていた通学班の先頭を歩く班長、それもやっぱりのぶ君がなつてしまった。おかげで僕は一番後ろを歩く副班長。いつまでたつても僕はのぶ君に勝てない。

前のほうで、いろんな子と話をしながら楽しそうに歩くのぶ君。僕は一番後ろで話し相手もない。そんな暇が多い通学路を、僕はいつも下を見ながら歩く癖があった。

見るのは通学路と、僕の前を歩く2年生の女の子。僕はその女の子の足を、いつも見ながら歩いている。今日はスニーカー、昨日は革靴。雨の日は、赤い長靴を履いてくる。多分この子が一番好きな色は赤色だと思う。だって、傘や雨がっぱもいつも赤色を使っているから……そんな事を考えながら歩く通学路は、僕にとって
はまったく楽しくともななくともない、つまらない時間ではなかった。

そんな通学路でも、1つだけ楽しみな場所がある。その場所は・

・ ・ ・ ・ ・ 富士山が見える丘 ・ ・ ・ ・ ・

静岡から遠くはなれたこの場所。それでも静岡の日本一高い山、富士山を見る事ができるのだ。その小さな丘を通るのが、僕のたった

一つの楽しみ。今日みたいに天気がいい日は、特にきれいな富士山を見る事ができる。

「ねえ見てよ！！すごくきれいだよ！」

その丘に着くと一番先頭ののぶ君が、みんなよりも早くそのきれいすぎる富士山を見て指をさしながら叫んだ。

「うわゝほんとだ・・・すごい」

みんなもどんどんその富士山に驚いていく。一番後ろの僕が遅れて見ると、そこには朝の太陽と大きな富士山が、遠くのほうできれいに輝いていた。

「・・・・・・・・ふ・・・・・・・・」

僕はその富士山を見ながら、朝の冷たい空気を大きく吸い込んで深呼吸をした。

（・・・・・・・・もしかしたら今日は、いい事があるのかも・・・・・・・・）

なぜだかきれいな富士山が見えた時はいつもいい事が起こりそうな気がした。久しぶりに見たきれいな富士山。僕はきれいすぎる富士山を見て少しの期待をした。

まだ冬の寒さが残る小学6年生を迎えたばかりの4月・・・・いつもの今日が始まった。楽しい小学校・・・・長い長い一日が始まったのだ・・・・

2、朝の会

「きりつ！れい……」

「おはようございます！！」

「ちゃくせき！」

朝の会が始まった。この授業の前とか終わった後に言う号令。号令はいつも日直がやる事になっていた。黒板の右下に書いてある今日の日直……。その日直当番は、お調子者のたけちゃんと、僕の大好きな綾ちゃんだ。

お調子者のたけちゃん。たけちゃんはいつもバカな動きやダンスでみんなを笑わしている。僕のクラスのムードメイカー。天才的なギャグと表情でみんなの注目をいつも集めていた。

そして、その隣の席に座るのが綾ちゃん。綾ちゃんは僕の初恋の相手だ。とにかくかわいい。どの角度から見ても、どんな表情をしていてもとにかく綾ちゃんはかわいいのだ。授業中や休み時間中、僕はいつもその綾ちゃんをボーッと見てしまう癖があった。綾ちゃんを見ているだけで、すごく心がどきどきしてくる。幸せな気持ちになってくるのだ。そんな僕は、今日もいつも通りに綾ちゃんの日直姿を一人でボケーッと見続けた。

「どうしたの？きよ君！！」

僕の隣の席の五十嵐さんが、ボケーツとしている僕を見て心配そうに声をかけてきた。

「・・・・・・・・あつ・・・・・・・・うん・・・・・・・・なっ・・・・・・・・なんでもないよ・・・・・・・・あはは」

僕は、見つめる目線を綾ちゃんから五十嵐さんに変えて、苦笑いで答えた。

だいたんで男っぽくて不細工な五十嵐さん。いつも僕はその五十嵐さんにバカにされたり、からかわれたりしていた。身長も僕よりぜんぜん大きい。迫力があつて力強い五十嵐さんは、僕にとってちょっと怖い存在の女の子かな・・・・・・・・

「出席を取りまーす・・・・・・・・阿部君」

「はい！！！」

「飯田君」

「あ・・・・・・・・はっ・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

先生の点呼が始まった。席替えをする前はその出席番号順に、「いちのかわ・にのかわ・さんのかわ・よんのかわ」に別れて前から座っていた。違うクラスでの呼び方は「一号車・二号車・三号車・四号車」だ。席替えは、2年ごとにクラス替えがあるから、クラスが変わらない6年生になった時にやったばかり。おかげで僕はその怖い五十嵐さんの隣の席になってしまった。大好きな綾ちゃんの隣をゲットするチャンスはまだしばらくこない。僕は「さんのかわ」で綾ちゃんは「いちのかわ」。今はまだ、席が遠いけど、いつか必ず綾ちゃんの隣に座る事を僕はずっと夢に見ていた。

「・・・・・・・・白川君・・・・・・・・白川 清正 君（しらかわ きよまさくん）！！！」

そんな事を考えていた僕は、自分の出席になっていた事に気付かないで、ボケーツとまた綾ちゃんを見つめていた。

「・・・・・・・・??あつ・・・・・・・・はっ・・・・・・・・はいいい！！！」

気付いた僕があわてて返事をする、お調子者のたけちゃんが席を立ち僕を指さしながら・・・

「はっはっは！！なんだよお今の声！！へ〜んなの！！！」

と言つて僕の声を大笑いでバカにした。それを聞いて、みんなも笑い出す。見ると綾ちゃんもそんな僕を見てクスクスクスかわいらしく笑っていた。そんなみんなを見ながら、僕はうつむいて赤くなることしかできなかった。朝から失敗で注目を集めてしまった僕は、ずかしすぎて情けない失敗・・・・・・・・・・

（やばい・・・・・・・・綾ちゃんの僕へのイメージが悪くなる・・・・・・・・大好きな綾ちゃんに嫌われちゃうよ・・・・・・・・・・なんとかこの後、かつこいい所を見せていかないと・・・・・・・・・・）

僕は心の中で、この失敗を取り戻す方法を必死で考え続けた。

3、笛のテスト

ピロオオ〜・・・・・・ピィ〜〜・・・・・・

いろんな所から笛の練習をする音が聞こえてくる。今は音楽室。音楽の授業が始まる前の5分間休みだ。

さつき（・・・・・・失敗を取り戻す方法は・・・・・・）と心の中で考えていた。そして、次は笛のテスト。まったく練習をしていない苦手な笛のテストだ。

（・・・・・・あゝあ・・・・・・）

僕は心の中でため息をついた。

今日はあんなにきれいな富士山を見る事ができた。もしかしたらいい事でもあるんじゃないかと少しの期待をした。それなのに、全部がどんどん悪いほうへ悪いほうへと進んでいつている。

（・・・・・・笛のテストでの失敗・・・・・・）

僕はそのほろかしい失敗の姿を、頭の中で想像をした。

そしてついに音楽室に授業が始まるチャイムが大きく鳴り響きわたった。

・・・・・・キーンコーンカーンコーン・・・・・・

チャイムが鳴るとすぐに音楽の先生が教室に入ってきた。いつもは

長く感じるはずの5分間休み。遊んだり、友達と話したり、違う教室に行ったりしていろんな事ができていた。でもなんだか今回だけは、すごく短い5分間に感じる。もう授業が始まる時間になってしまった……

「はい！！今日は先週話した通り、笛のテストを行う日です。一人ずつ順番に前に出てきてもらい、笛を吹いていただきます！！」

「えゝもゝやるのおおゝ！？」

みんなの不満な声が音楽室に響いた。それでももちろん先生は待つてくれない。

「はい！！！！では阿部君から！前に来てください！！……あつちよつと待つて、たまには女の子から行きましようかねゝ」

「えゝ！！！！」

遊園地の絶叫マシンに乗った時の悲鳴。それに似た叫び声で女子達が叫んだ。

（ふうゝ良かった……女子からだから僕の順番はまだまだ先だ……）

自分の順番が少し遅くなって、ちよつとだけ気持ちになる。

「はい！上手でしたね。よくできました。続きましては……」

……名前を呼ばれた子は、前に出てみんなが見守る

中、笛を演奏する。どんどんその笛のテストが進んでいった。はじめは順番が遅くなって安心と思っていたけど順番を待っていると、その時間が長ければ長いほど逆に緊張が大きく辛くなってくる。僕はその緊張をごまかすために、音楽室に飾ってある額に入ったいろんな有名な音楽家の絵を見始めた。

なんだか不思議なその絵……いろいろな表情のいろんな絵が飾ってある。何のために飾ってあるんだろう？顔を覚えて何かテストでもするのかな……？僕はその絵が飾ってある理由がいつも気になっていた。

だいぶ前に、夕方の音楽室に入った事があった。その時見たその音楽家の絵達は、ものすごく不気味で、なんだか少し怖さを感じた事を覚えている。いつもは何気なく見ている絵。暗くなると動き出すんじゃないか……そんな風に思えた。

「さて、次の順番は……渡辺 綾香さん!!」

(………??)

気付くと笛のテストはもう綾ちゃんのところまで来ていた。

「はい……」

かわいい声での綾ちゃんの返事。

綾ちゃんは音楽がすごく得意。勉強もいつも上のほう。体育だけが少し苦手だった。みんなも綾ちゃんの得意教科が音楽だということを知っている。そんな綾ちゃんに注目が集まった……みんなも期待をしているみたいだ。

ピイイ〜パイロロ〜……………予想通り、すごく上手。
他の子よりぜんぜんうまい。

（なんで綾ちゃんはこんなにうまく吹けるんだ……………いいな〜
綾ちゃんは……………）

そんな綾ちゃんを僕はうらやましく思った。

こんなにかわいくてきれいな声で、しかもやさしい綾ちゃん。多分、綾ちゃんの事を好きな男子は僕だけじゃないはずだ。好意を持っている男子が他にもいるはずだ。男子の間でアイドル的な存在の綾ちゃん。僕はその綾ちゃんを、他の男子に取られたくないとも思っていた。

進んでいく笛のテスト、順番がお調子者のたけちゃんの番になった。

「えっ僕ですか？僕に吹かせるなんて……………いいんですか先生？
お金取りますよ」

お調子者のたけちゃん。こんな時でも、みんなを笑わせるような事を言っている。そんなたけちゃんを見て、笑っているみんな。僕は笑いながら様子を確かめるように綾ちゃんのほうをチラッと見てみた。

たけちゃんと綾ちゃん、教室の席は隣だ。その2人を見てみると、くだらない事をするたけちゃんを見て、綾ちゃんはいつも楽しそうに笑っていた。仲のいい2人。この時もやっぱり綾ちゃんはそのたけちゃんを見て、素直な笑顔でかわいらしく笑っていた。

人気の綾ちゃん。多分、その綾ちゃんが好きな男子はたけちゃんだ。

2人のやり取りとか表情を見て、僕はいつもそう感じていた。

（あゝあ……僕もあんな風におもしろくできればいいのになあ……そうすれば綾ちゃんも、もしかしたら僕の事を好きになってくれるかもしれないに……）

僕にないものを持っていくたけちゃん。そんなたけちゃんを見て、僕は悔しい気持ちでいっぱいになった。

緊張もしないで余裕のたけちゃんだったけど、演奏を聞くとその笛はぜんぜんへたくそ。へたくそでもここまでバ力ができればまったく問題がないのだ。たけちゃんらしいや……で終わってしまう。

（よし！今日は僕もみんなを笑わせるような事をやってみよう！！へたくそでも、おもしろければみんなは認めてくれるはずだ！！）

僕は緊張をしながらも、何か新しい事をしようと思っただ。

「はい！！次は白川 清正君です！！」

（……えっ！……ぼっぼっぼっ……僕の番？……）

順番がまわってきて、一気に緊張が高まってしまった。今さっき、（おもしろい事をやってやろう……）と思ったはずなのに手が震えて、体も震えて、もうどうしようもない。

「白川君！！返事はどうしたの？？」

「ははあっ……はいいい！」

声が裏返った。周りの友達が小さい声でクスクスクスと笑う……はずかしい。ふらふらと緊張の足取りで前まで行くと……

ピロオオ！ピロオロオツ……。プイイ！……。震えて音にならない。別におもしろい事をしようとしてそんな音を出したわけじゃない。でもその笛の音を聞いたみんなは、今度はさっきより大きめな声でクスクスクスと笑い出し始めた。

どどんはずかしくなっていく僕。ついには顔まで真っ赤になってきた。

（くそおお！！もうどうにでもなれだ！！！！）

いきおいで吹いた笛。何とか全部を終わらせる事ができた。

「はい。次は緊張しないでできるようにね。さて次は……」

もう頭の中は真っ白。席に戻り座るとそんな僕を見て、隣にいた五十嵐さんがいつもの低い小声で僕に言ってきた……

「なにやってんのよきよ君！音が震えてぜんぜんだめだったわよ！！」

言われて得意の苦笑い。でも僕はその笛のテストが終わったというだけで、心の底からほっとしていた。

結局みんなを笑わせる所か、笑われるだけで終わってしまった笛の

テスト。多分みんなは、清正君らしいや……. と思ってるんだろ。そう僕のイメージはいつもそんな感じ…….

緊張しやすい清正君。頭が悪い清正君。何をやってもうまくいかない、そんなイメージの悪い小学生がこの僕なのだ。得意な科目は特になし。スポーツも普通。女の子と話すのはすごく苦手。気が弱くて情けない男の子。そんな僕の得意技は失敗。何かの発表とかで僕はいつも失敗ばかりをしていた。僕が失敗をすると、みんなはいつも冷たい目で僕を見つめる。「まただよ…….」といういやな冷たい目だ。そんな中で僕ができることは決まっていたつも「苦笑い」。毎日毎日そんな日々の繰り返しだ。人気がない目立たない失敗だらけの小学6年生。それがこの僕なのだ。

「はい！！全員終わりましたね！！それでは今日の音楽の授業はこれで終わりになります。次は20分休みです。みんな怪我をしないように遊んでくださいね！！」

音楽の先生がみんなに言った。

2時間目が終わってからやってくる、20分休み。長くて楽しい遊び時間だ。みんないろんな自分の楽しみ方でその時間を使う。教室で絵を描く子、友達と話す子、校庭で遊ぶ子、サッカーをする子、いろいろだ。僕はいつもその時間を使って、親友ののぶ君と校庭で遊んでいた。音楽の先生が言ったその20分休みという言葉を聞いて、僕はのぶ君と目と目を合わせた。そして目を輝かせながら、2人揃って大きくうなづく。2人で遊ぶという合図だ。僕達は教室にあるボールを取りに、走ってはいけない廊下をみんなよりも速く駆け抜けていった。

4、勝負の20分休み

人気がない目立たない小学生。そんな僕にも、一つだけみんなの注目を集めるすごい事がある。それは……僕の親友がのぶ君という事だ。

クラスのアイドルが綾ちゃんなら、のぶ君はクラスの憧れのヒーローだ。かつこよくてリーダーシップがあってしっかり者ののぶ君。勉強もできてまじめで、しかもスポーツがものすごく万能。そんなのぶ君を、女子達はいつも憧れの目で見ている。僕の自慢の親友なのだ。

（いったいなんでのぶ君はきよ君なんかと仲がいいんだろう……）

みんなはそんな風に思っているはずだ。その理由は僕とのぶ君が隣近所の幼馴染だから。僕はこんな人気がない僕と、いつも仲良くしてくれるのぶ君にすごく感謝をしていた。

そののぶ君と一緒に遊ぶ20分休み、いつもやっているのは人気がある「ドッジボール」だ。校庭に大きな四角い枠のコートを作る。そのコートでチームに分かれてボールをぶつけあうゲームだ。サッカーと違って、このゲームは女子達も一緒に遊んでいた。今日もいつも通りにチームを2つに分ける事になった。

「よし行くよ……グツとパツ!!!」

のぶ君がそのチーム分けを仕切った。

チームを2つに分けたりする時にやるこのジャンケンみたいなやつ。これにはいろんな種類がある。僕の小学校ではこの「……グツとパツ!!……」というリズムを使っている。グーとパーでチーム分けをするのだ。でも隣の小学校では「……グーパージャス!!……」でチーム分けをしている。同じグーとパーなんだけど、そのリズムが違う。他にも「……グツとパー……」で分かれましょ!!……」とかいろんな種類がある。僕が知っている中で一番珍しかった分け方は「……グ……グ……グチグチグーチージャス!!……」だ。なんとグーとチヨキでチーム分けをするのだ。初めやった時はビックリした。焦ってパーを出してしまつてみんなにバカにされたりした。もしかしたら、ものすごい遠くの小学校では、もつと珍しいチーム分けの仕方をしているのかもしれない。なんだか僕は、そのいろんな種類のチーム分けがおもしろくて仕方がなかった。

さあ、今日も2つに分かれて対決だ。

(さてさて……今日の僕のチームはどんなチームだ……強いチームかなあ?)

僕はそのチームのメンバーに目を向けてみた。見ると僕のチームには、何でもできる僕の親友、のぶ君が入っていた。のぶ君が1番で僕が2番。いつもはのぶ君に負けているけど、今日のドッジボールは一緒にのチーム。なんだかすごく心強い。その他の僕のチームメンバーを見てみた。するとそこにはあの大好きな綾ちゃんが立っていた。もし綾ちゃんが当てられそうになった時、僕が助ける事ができたらどんなにかっこいいだろうか!!

今日はもう2回も失敗をしている僕。出席の時間と笛のテストだ。それを見て、綾ちゃんが僕の事を少し嫌つてしまつたかもしれない。

僕はなんとかその失敗を取り戻そうと、この遊び時間の20分休みに勝負をかけた。そして、その運命のドッジボールがスタートする。

（よし見てろよ……絶対にこいついい所を見せてやる……）

はこっ！……一瞬で散ってしまった僕。いつもはふざけていたけど、スポーツはすごく得意。あっけなくそのたけちゃんのボールで、僕は撃沈してしまった。

（くそ……何がかっこいい所だ！はずかしい……）

結局簡単にやられてしまった僕。そんな情けない自分に、心の中で文句を言った。こうなったら後の頼りはのぶ君だけだ。

たけちゃんとのぶ君はクラスのスポーツライバルだ。どっちも本当に運動神経がいい。いつもいい勝負をする2人に、みんなの注目が集まったりする。僕と違ってかっこよく目立てる2人。僕は、そんな2人がすごくうらやましかった。

（あつ綾ちゃんが狙われている……）

狙っているのは普段は仲がいい、あのお調子者のたけちゃんだ。

「ちょっとたけ君！なんで私ばかり狙うの……狙わないでよ……」

「へっへええ……いやだねえ……それ……」

（……くそつたけちゃんめ……綾ちゃんばかり狙って……い

つもはあんなに仲がいくせに・・・)

そんな風にも思ったけど、なんだかそんな2人の関係が少しうらやましくも感じた。

(あっ・・・)

気付くと、たけちゃんの鋭いボールが綾ちゃんめがけて飛んでいる！！・・・

ばん！！

見事にボールを取ったのは・・・スポーツ万能の、のぶ君だ！

(よしさすがだのぶ君！！僕の親友だぞ！！)

自分の活躍じゃないのに、のぶ君の好プレーを見て僕は心の中でえばった。そしてここから、僕とのぶ君の攻撃が始まる。

「行くよ！きよちゃん！！」

のぶ君から外野の僕にパスが回ってきた。最強コンビでたけちゃんやっつけてやる！まずは、何度も何度もパスを繰り返す！タイミングをはかっているのだ。いつもならそのままいいタイミングでのぶ君が相手をやっつける！！そんな展開だ。でも今日の僕はいつもと違う！！ここまでの失敗を取り戻すために、自分からどんなせめていつてやる！！標的はもちろん綾ちゃんをいじめた悪者のたけちゃんだ！！正義のヒーローがこの僕だ！！

(見てろよたけちゃん・・・)

と思ったその時、低めのパスがのぶ君から飛んできた。素早くそのボールを僕が取った！あわてて足を滑らせるたけちゃん！！そこで転んだたけちゃんが一言……

「あつやべえ……」

今がチャンスだ！！！！今日一番の見せ所！！かつこよくたけちゃんをやっつけてやる！！力いっぱいいたけちゃんに向かって投げたボール！！

「くらええええつ！！」

ボールは見事に……校庭を力強く弾んだ。

「あれっ……」

「なにやってんだよ！！きよちゃん！！」

それを見てのぶ君が僕に怒鳴った。やっぱり僕はいつもだめ男だ……

「あつやばい！時間だよ！！」

時計を見たたけちゃんが、みんなに向かって言った。校庭に響き渡る授業開始のチャイム。次の授業が始まってしまふ。僕達は校庭を砂ぼこりいっぱいしながら駆け足で教室に戻った。

結局、この20分休みでも綾ちゃんにかっこいい所を見せる事ができなかった。頑張つて逆に失敗を重ねてしまった。僕の心の中は情

けなさだけで、いっぱいになっていた。

5、教科書の読み

何をやってもだめな僕。結局、それは遊び時間の20分休みでも同じだった。次の授業は社会、今は歴史をやっている。

社会の歴史はちょっと難しく感じたりもするけど、おもしろく感じる時もある内容が多い。いろんな昔の歴史上の人物。そんなすごい人のすごい話を聞いていると・・・

（かつこいいな）

とか思う時がある。

社会だけじゃなくて国語の教科書なんかもすごくおもしろい。特に国語で僕が好きな話、それは「スイミー」だ。小さい魚がいっぱい集まって大きな魚を驚かせる話。なんだかその世界にすんなり入れてすごく楽しい話だ。その他にも「ちいちゃんのかげおくり」とかすごく楽しい話が多い。

だけどそんなおもしろく感じる社会や国語なのに、授業中だとぜんぜんつまらない。なぜなら、その教科書をみんなの前で読む時があるからだ。

出席番号順にまわってくるその順番。指されて立たされて、その教科書を読む。読み書きが苦手な僕にとっては、その教科書を読むというのがすごく苦手。しかも僕はあがりしょうの小心者だ。そんな僕が恥をかく一番のタイミング、それがその音読なのだ。

僕が読む時はいつも声が震えてどうしようもなくなってしまう。し

かも、わからない漢字がある時は、途中で止まって言葉に詰まる。そして小さな声で隣の席の五十嵐さんにその読み方を聞いたりする。

「ねー……ここなんて読むの??」

それを聞いた五十嵐さんは、みんなに聞こえる大きな声でその読み方を言ってしまう。

「その字は冷静よ!! れいせい!!!」

そうすると、みんながまた冷たい目で僕を見る。

(……そんな漢字も読めないのかよ……)

という冷たい目だ。はずかしい。

僕と違ってそれが得意な人の読みを聞いていると、なんだかすごく聞きやすくその内容がものすごく伝わってくる。国語や社会の読み。クラスで一番聞きやすいのは、やっぱり綾ちゃん。きれいな声ですらすら読んでく。しかもものすごくかわいらしい読み方。

男子の中では、のぶ君。感情表現も入っていて、なんだかかっこいい読み方だ。逆に、すごく下手に感じる人……それは、僕と同じあがりしょうで小心者の飯田君だ。

太っていて給食が大好きな飯田君。体育と勉強はほんとに苦手。しかもものすごく緊張しやすいのだ。そんな飯田君のもう一つの特徴が、不潔なイメージ。気を抜いているとすぐによだれをたらして、服にはいつもきたない汚れがこびりついている。机にも給食の汚れがついていて、しかも何日もそのまま。その汚れが乾燥していて力

ピカピで汚らしい。だけど、そんな飯田君にも仲良くしてくれる親友が1人だけいた。それは、やせている無口な山田君だ。

まったく目立たない地味すぎる山田君。見た目は細くて身長だけはやたらでかい。そんなでかいのに目立たないのだ。僕はその山田君の声を聞いた事がほとんどない。とにかく無口。もしかしたら一日中しゃべらない時もあったりするんじゃないか？と思ったたりするくらいだ。

2人は地味でかつこ悪い、クラスでもレベルが低いデブヤセのここぼこコンビだ。僕はいつもそんな人気がない2人とあまり仲良くしすぎない努力をしていた。だけど・・・僕が何かの発表とかで失敗をすると、その授業が終わった後、飯田君は必ず笑顔でやさしく僕に話しかけてくれた。多分同じ匂いがあるんだと思う。僕の失敗にやさしくフォローを入れてくれる。うれしいような、哀しいような・・・僕はそんな複雑な気持ちをいつも味わっていた。

「はい、では飯田君。次からの文章を読んで下さい。」

「ははっはいいいい・・・」

その飯田君が、ここからの文章を読むらしい。こんな時、同じ辛さを知っている僕は飯田君を心の中でいつも応援をしている。

（よし・・・失敗するなよ・・・漢字は大丈夫かな・・・）

飯田君が読む文章を、先に目で追って読んでいく。今回は難しい漢字はなさそうだ。

（大丈夫だぞ！飯田君！！後は緊張しなければいけるよ！！がんばれ！飯田君！！）

そしてついに飯田君の読みが始まった……

「……そつ……その……よ……よくとし……えつ
翌年であつてゐるよね？あつとつ徳川 いっいえやす？……は……

」

（……やっぱり緊張で文章がめちゃくちゃだ……あゝあ……
……可哀想に……）

いつもこの飯田君の順番が回ってくると、僕もその読みの準備を始める。名前の順でいくと、僕はその飯田君の10回後に順番が回ってくる。前もつてだいたい10回先の文章を見て漢字に読み仮名をふつておく。

（……よし！これで準備万端！！いつでもかかってこいだ！
！後は緊張さえしなければぜんぜん楽に読めるぞ！！）

今日もその読みの準備をして、気合を入れてその順番を待った。

キンコーンカーンコーン

（……あれれ！？せつかく読み仮名までふつて気合入れて
待っていたのに……）

僕の順番は回つてこないで、その社会の授業は終わってしまった。
でも成功もなくなつたけど失敗もなくなつたので、本当はすごくほ
つとしていた。

「はい！！今日の社会の授業はこれでおしまい。次は給食の時間で

す。みんなあわてないで準備をしてくださいね!！」

「きりつ・・・れい」

「ちやくせき!！」

授業が終わると僕はすぐに飯田君のところに行って、やさしくさ
つきの失敗を忘れる話をしてあげた・・・・・・・・・・

6、給食でのお願い

やってきた！！給食の時間！！しかも今日の献立は僕の大好きなあげパンだ！！一か月分のメニューが載っている献立表。僕はそれを見ながら毎日毎日、このあげパンの日をすごく楽しみにしていた。

今日の4時間目までは本当に辛かった、恥ずかしさの連続。出席に笛のテスト、それに20分休みまで、ほんとに恥のかきまくりだ。でも終わってしまえばもうそれまで。友達も今は、もう僕の失敗を忘れているはずだ。給食着に着替えた僕はおぼんから順番に給食を取りにいった。

給食にはそれぞれ係りがある。勝手に多く持っていたり、嫌いなものを持っていたりいなかったりしないように、その係りの人が平等に配っているのだ。今日も、おぼん・おわん・あげパン・野菜炒め・卵スープ・みかんの順番で給食係がいた。大好きなあげパンを配る係りの人……それはお調子者のたけちゃんだ。

「たけちゃん。悪いんだけどそっちの粉が固まってるあげパンのせてくれない……？」

甘い粉が大好きな僕は、小さな声でたけちゃんにお願いを試みた。するとたけちゃんは……

「笛のテストがへたくそなやつ言う事なんか聞きたくないねえ！」

と嫌な笑顔で言ってきた。

(・・・なんだよたけちゃん！！いじわるだな！！！すっかりさ
つきのテストのこと覚えていやがった！！くそっ！自分だってぜん
ぜんへたくそだったくせに！！・・・)

僕が、意地悪なたけちゃんの事を細めで睨んでみると、たけちゃん
は・・・

「そんな目で見ないでよ！！みんなのわがままなんか聞いていられ
ないの！こつちだって係りなんだからさあ！」

と言つて粉の少ない普通のあげパンを、雑に僕のおぼんに乗つけた。

たけちゃんは変に意地悪な所がある。悪気はないのかもしれないけ
ど、意地悪に感じてしまう時があるのだ。僕はなんだかそんなたけ
ちゃんが少し嫌いだった。それさえなければおもしろいだけのいい
友達なのに・・・

「はい。みんな準備はいいですか？・・・では。いただきますをし
ますよ・・・はい！いただきます！！」

「いただきます！！」

まあとにかく、おいしくて楽しいみんなの給食が始まった。

給食が始まると、すぐにいろんなみんながあげパンのところに集ま
りだした。余ったあげパンを取りに行ったのだ。もちろんその全員
があげパンをもらえるわけじゃない、数には限りがある。そのあげ
パンをもらうにはジャンケンで勝たないとダメなのだ。僕も急いで
みんなのところに行ってそのジャンケンに参加をした。

「よーし行くよ……ジャンケンポイ!!」

みんなで口を揃えてジャンケン開始！結局1回目を勝ち残ったのは、僕を入れた4人だけだった。その勝ち残りメンバーは……僕・のぶ君・五十嵐さん・理沙子ちゃんだ。だけど、残っているあげパンは2つ。まだ全員がもらえるわけじゃない。もう1回ジャンケンで勝たないとならない。

「くっそおお!!絶対食べたかったのにいい……」

ジャンケンに負けた給食好きの飯田君が、ものすごい力の入った表情で悔しがった。

「はっはっはっ！ごめん飯田君！でももう1回ジャンケンしなきゃだめなのか……勝てるかな……あれっ？きよちゃんも残ってるの？これは負けられないな……!!」

のぶ君が頭をかきながら言った。そんな事を言っているけど、あの笑顔さはいつも通りの勝ちを予想しているはずだ。その隣では五十嵐さんが興奮しながらジャンケンを手で占っている。

「ふうう〜ふうう〜……絶対に負けない!!」

手と手を絡むように組んでひっくり返し、そのすき間を片目で見る。何が見えるのかわからないけど、なんだかジャンケン占いらしい。男にも負けなくらい大きな五十嵐さんは、占いなんかしなくてももんだかジャンケンが強そうに思えた。僕の横には理沙子ちゃんがいる。

「どうしよう？昨日は負けたから今日は勝ちたいなあ．．．」

クラスでは1番大人っぽい理沙子ちゃん。すぐませていて、いつも恋愛話を女友達と話している。豪快で大胆な所もあったりするけど、五十嵐さんのそれとはまったく違う。五十嵐さんみたいに男っぽいと言うよりはリーダーシップがあつて、積極的。そんな所が豪快で大胆に感じるのだ。そんな理沙子ちゃんは僕とはあまり話をしたことがない、少し遠い存在に感じる女の子。

「よし！いくぞー！ジャンケンぽい！！」

のぶ君の声にあわせてジャンケンが始まった。結果は．．．僕はグー。五十嵐さんもグー。残りののぶ君と理沙子ちゃんは．．．手を大きく開いたパーだった。

「やったー！俺の勝ち！！」

のぶ君が大喜びをした。のぶ君に負けるのはわかっていた。いつも勝てないのぶ君だから．．．でも余っていたあげパンは2つ。なんとかもう1つのあげパンを食べたかった。

（．．．あゝあ．．．残念だな．．．）

僕が悔しい顔をしていると、隣にいた理沙子ちゃんが．．．

「なんか勝ったけどあんまり食べたくないなあ．．．きよ君。あげパンあげる。」

その言葉を聞いて、僕は少し驚きながら答えた。

「…………えっ……いいの？せっかく勝ったのに……」

すると理沙子ちゃんが、首をかしげて少し悩んでから僕に言った。

「うん。別にいいや！！気にしないで！」

（…………やったああラッキー！！負けたのにあげパンゲットだ！！うれしいな！！）

僕が興奮をしながら喜んでいると、あげパンをくれた理沙子ちゃんが僕に一步近づき、言いづらそうに小声で話しかけてきた。

「…………そのかわり、後でお願いがあるんだけど聞いてくれる？」

（……………お願い？いつたいたんだろう。まあ、お願いだかがなんだか知らないけど、あげパンが食べられればなんでもいいか。）

そう思った僕は理沙子ちゃんに…………

「いいよ！何でも言うて！！」

と大きな声で返事を返した。

「ちよつとおー！あげるなら私にちようだいよおおお！！」

ジャンケン占いまでしたのに負けてしまった五十嵐さんが、ものすごく悔しそうな顔でどたと足踏みをする。

（こんな時は逃げるが勝ちだ！さっさと席に戻ってあげパンを食べ

てしまおう！）

僕は自分の席に着くと急いでそのあげパンを食べ始めた。すると・
・
・

「やああほおお！！」

みかんカゴの前から大声が聞こえる・・・・見ると変な踊りをしながら叫ぶたけちゃんが。

「いえーい！みかん3つゲットオオ！！」

あげパンに人気が集まって、みかんジャンケンにはぜんぜん人が集まらなかつたみたいだ。少しうらやましくも思っただけ僕もあげパンをゲットしている。まあ今日の所はあげパンだけで我慢しよう。

おいしいあげパンだったけど2つ全部食べるのはさすがに辛い。おなかがいっぱいで少し余ってしまった。捨てるのももったいないからポケットに入っている小さいビニール袋にあげパンをしまっておいた。

家で食べる給食のパンはなぜだかすごくおいしく感じる。僕はその余ったあげパンを家に持って帰る事にした。家での楽しみが1つ増えた。袋にしまったあげパンを、机の引き出しの中に大切にしまった。

どんどんみんなが給食を食べ終わる。食べ終わったら食器の後片付けだ。牛乳パックは1人が上の部分を大きく開いて、残りのみんなのパックを2つ折りで詰め込む。給食の片付けにも係りが決められていた。僕はその牛乳係り。たまに友達の牛乳パックを僕が折り

- ・ たたむと、残った牛乳が飛び出して服とか手にかかったりする。少し気持ち悪くていやな係りだ。でも係りだからしょうがないか・・・

7、図書室でのお昼休み

給食が終わってすぐにやってくる、20分休みよりぜんぜん長いお昼休み。僕にとってこのお昼休みは大切な時間だ。

「きよちゃん！！またドッジボールやろうよ！！」

のぶ君が20分休みの時みたいに、ボールを持って僕のほうにやってきた。

「……ごめん、のぶ君。お昼休みはやめとくや……」

すごく楽しいドッジボール、だけどお昼はいつもやらない事になっている。なぜかというと、僕はお昼休みを別の楽しみに使っていたからだ。大切な僕の時間……心を落ち着かせる事ができる大切な僕の場所……

静かで物音がしない部屋……窓から入る陽の光が部屋いっぱいに広がって……
すごく暖かくて……すごくきれいで……

僕は昼休みに、必ずこの図書室へと来ていた。この図書室と言う場所は、なんだか他とは違う特別な雰囲気がある。心が温まる特別な雰囲気。僕はその雰囲気がすごく好きで、いつもいつも本を読みながら、外の景色とか周りのみんなを見て静かにその時間を使っていた。

（さて！！今日も昨日読んでいた本の続きを読もう！）

僕は昨日から見ている「日本の歴史3」を手にとった。

本当に読書が好きな人は、なんだか難しい本を読んだり厚めの小説を読んだりしている。でも僕は、そんな文字がいつぱいの本が好きになわけじゃなくて、この部屋の静かさと他の教室と違う雰囲気が好きただけだ。だから読む本はいつもこの「日本の歴史」。中を開くと細かい字もいつぱいあるけど、途中におもしろい漫画があったりする。僕の目的はその漫画の部分。家で新聞を開いたりする。でも目的は4コマ漫画だけ。僕はこの歴史の本も、その新聞と同じ使い方をしていた。

「きよ君!!」

(・・・??)

呼ばれて振り向くと奥にある図書室の入り口に誰かが立っているのが見えた。よく見るとその子は、さっき給食の時間にあげパンを僕にくれた理沙子ちゃんだった。

(あっそうだ!そういえばさっき、給食の時に何かお願いがあるって言っていたな・・・そのお願いを言いに来たのかもしれない・・・)

僕は席を取られないように本を開いて机の上に置いた。そしてすぐに理沙子ちゃんのほうに歩いて行く。

「理沙子ちゃんごめん。さっき言ってたお願いの事だね。」

それを聞くと、理沙子ちゃんは・・・

「うん。そうなんだけど……」

そこまで言うと理沙子ちゃんは、なんだかはずかしそうにもじもじしながら下を向いてしまった。そして、少しの時間を置いた後、またその続きを話し始める。

「……あのさ……ここじゃあ言えないから今日の帰りに話してもいい?……」

なんだかいつもと雰囲気が違う理沙子ちゃん。いつもは他の子より大人っぽくてはきはきしているのに、今日は何だかすごく女の子らしい表情をしている。そんな理沙子ちゃんを見て、なんだか僕は少しどきどきしながら返事を返した。

「べつ……別にいいよ……」

それを聞くと、理沙子ちゃんはうれしそうに答えた。

「……やった!!……それじゃあ……今日一緒に帰る!」

「……帰りを誘われてすごく驚いたけど、すぐにOKと答えた。」

(???理沙子ちゃんはいったいなんの話があるんだ?もしかして僕のことが好きなのかな??告白!??まさかね……)

はじめ聞いた時はちょっとしたお願いだと思っていたけど、なんだか大切な事みたいで少しそのお願いが楽しみになってきた。

話も終わったので、席に戻って本の続きを見る事にした。「日本の歴史3」ももうすぐ終わり。今日中に次の歴史を読みたい。毎日毎日少しずつ進んでいくその内容が、僕にとってはすごく楽しみ。早く進めたいその内容。僕は漫画を読んでいるというより、目を通しているというスピードで、とにかく次から次へとページをめくりまくった。ふと時計を見ると、もうお昼休みになって20分近くもたっている。

「……………遅いなあ恵美ちゃん……………」

独り言を言った。

僕がこの図書室に来る理由。本当は、特別な雰囲気や読書だけがその理由じゃなかった。そのもう一つの理由、それが隣のクラスの恵美ちゃんだ。

僕と同じく、必ずお昼休みに図書室へやってくる恵美ちゃん。メガネをかけてて無口でおとなしくて、内気な性格。もちろん趣味は読書だ。でも勉強がものすごくできるわけじゃなくて、レベル的には普通。運動はすごく苦手。背が小さくてかわいらしくてやさしい……………僕はそんな恵美ちゃんに会える図書室がすごく好きだった。恵美ちゃんと一緒にいるとすごく心が癒される。嫌なことも悩みも全部忘れる事ができる。気持ちがいい雰囲気の図書室とやさしい恵美ちゃん。僕はその2つを感じられるお昼休みをとにかく楽しみにしていたのだ。

そんな恵美ちゃんは給食を食べるのが大の苦手だ。好き嫌いが多い恵美ちゃん。給食は必ず全部食べるのが学校のルールだ。食べるのが遅い子とか好き嫌いが多い子は、そのお昼休みの時間まで使って給食を食べさせられた。今日もその恵美ちゃんは、給食が長引いて

しまつて図書室に来るのが遅れてしまつている。いつもなら10分もたてば来るはずなのに、今日はまだ来ない。僕は少しその恵美ちゃんが心配になつてきた。

「清正君……ごめん……待つた？」

声を聞いて後ろを振り返ると、その心配をしていた恵美ちゃんがいつの間にか僕の真後ろに立つていた。

「あつ恵美ちゃん！遅かつたね。心配したよ！どーしたの!？」

「うん。苦手な野菜炒めがあつて………それで………」

「あつ………そうだったんだ。それならしょうがないね！ほら早く本読まないと時間なくなっちゃうよ!」

恵美ちゃんがやってきて一安心。いろんな話をしながら、僕の大好きなお昼休みの時間を2人で仲良くいっぱい楽しんだ。

8、理沙子ちゃんとの下校

長すぎる一日。ほんとに今日は長かった。思い出してみると、今日は失敗がすごく多かった。まっそれはいつもの事だけど・・・やっとその全部が終わって、今は帰りの下校道。朝来た道をそのまま戻る。今日も、のぶ君と一緒に帰ろうと思って元気にのぶ君を誘ってみた。すると、のぶ君はすごく申し訳なさそうな顔をして・・・

「ごめん！きよちゃん！今日は学級委員の仕事で学校に残らきゃいけないんだよね。」

と言って断られてしまった。今日は寂しく1人の帰り道。

校門を抜けると、さっきまでいっぱいいた下校の子達もいなくなってしまった。住宅街が並ぶ長い一本道、1人で寂しくとぼとぼ歩くのんびり歩いていると、少し怒った言い方で僕を呼び止める声が聞こえた。

「きよ君！！・・・きよ君ちょっと待ってよ！！」

そこには僕のクラスの理沙子ちゃんが立っていた。

（・・・・・・あっそうだ！！今日は理沙子ちゃんと帰る約束をしていたんだっけ・・・そういえば、お願いがあるとか言っていたな・・・・・・）

お昼休みにあれだけ念を押されて、それでもその事をまた忘れている僕。理沙子ちゃんが怒るのもわかる。

「ごめん。理沙子ちゃん。忘れて先に帰ってた・・・はっはっ・・・はっ・・・」

なるべく怒らせないように、その台詞を言っただつもりだった。それでも・・・

「もー！きよ君、忘れないでよ！！」

やっぱりひどく怒られた。続けて不思議そうな顔で僕に聞いてきた。

「あれっ??今日、のぶ君は??」

それを聞かれた僕は・・・

「あゝ今日は学級委員で学校に残らなきゃいけないんだって・・・それで一緒に帰れなかったんだよね。」

すると理沙子ちゃんは、なんだか寂しそうに・・・

「へー・・・そーなんだ・・・」

と答えた。

恋愛話が好きで大人っぽい理沙子ちゃん。そんな理沙子ちゃんのお願いを、僕はすごく楽しみにしていた。それでも僕は焦らずに、なるべくその本題には触れないように、2人で楽しい下校を楽しむ事にした。

2人でいろんなくだらない話をしながら帰り道を楽しむ。帰りの坂

道、2人で競争。僕が勝って理沙子ちゃんをバカにする。その坂道が終わると今度は毛虫がいつぱいいる木がある。その木の下には毛虫の死骸がいつぱいあった。その死骸に向かって2人で押し合って騒いで通る。理沙子ちゃんに強く押されて、僕が毛虫の木の真下にそこにある死骸を踏まないように、うまくかわして通り抜けた。そんなくだらないやり取りをしながら2人で楽しく歩き続ける。なんだかすごくませていて、少し気も強そうで……。普段はあまりしゃべらない理沙子ちゃんだったけど、なんだかこうしてしゃべってみると普通の子。というよりも、なんだか他の子よりもしゃべりやすく感じられた。

イメージと違う理沙子ちゃんの印象を感じながらいろんな会話をして歩いていると、いつもより帰り道がぜんぜん早く感じられた。見るともう、僕の一番好きな富士山が見える丘についていた。そこには夕日に変わりそうな太陽の中、まだまだ元気な富士山がはっきりと見えていた。疲れてあまり会話がなくなってきた2人。その丘から富士山を見ながら、無口になったまま静かに歩き続けた。すると理沙子ちゃんが、落ち着いた表情でゆっくりと僕に話しかけてきた。

「そうそう、それでさ……。給食の時に言ったお願いんだけど……」

ついに本題が始まった。待ちに待った理沙子ちゃんの僕へのお願い。

図書室の時、理沙子ちゃんはなんだかはずかしそうに僕と話をしてた。もしかしたら僕のが好きなかもしれない……。あの時僕はそんな風に感じていた。なんだか少し期待が高まる。理沙子ちゃんが僕に告白をするのではないか……。そんな期待が高まってきていた。

「実はさ．．．私．．．のぶ君のことが好きなんだよね．．．」

．．．．．完全な勘違い。予想通りの恋愛話だったけど、僕じゃなくてのぶ君への告白。まあ、そんなもんだろうと思っではいたけど．．．でも実は、いつも楽しそうに騒ぎながら恋愛話をしている理沙子ちゃん達がすぐくうらやましかった。なので、僕もその話題に入る事ができただけですごくうれしかった。

「あつ．．．そうなんだ．．．のぶ君かつこいいもんね！」

興奮も驚きもしていないふりをして、うまく答えを返した。でも本当は心がどきどき。あの理沙子ちゃんが好きな男子は．．．．．なんと、のぶ君だったのだ！そして理沙子ちゃんが続けて僕に言うてきた。

「それでさつ．．．きよ君つてのぶ君と仲がいいよね？だからなんとかしてくれないかな」って思ってたさ．．．」

これが理沙子ちゃんの僕へのお願い。2人をくつつけてほしいと言うのだ。でも、そういう恋愛話が苦手な僕は．．．

「．．．．．うん。なんとかって言ってもね．．．．．」

言葉に詰まった。言葉に詰まっていると理沙子ちゃんが．．．

「ねーねーその前にさ！のぶ君つて他に好きな子いるの？？」

どんどんせめてくる理沙子ちゃん。やっぱりそういう話には慣れて

いるだけあつて、新しい言葉がどんどん出てくる。

「えっ……え……好きな子って……そんな話のぶ君としたことないしな……」

なれない話の内容で、僕は言葉が詰まっただけ。僕がおどおどしていると、続けて理沙子ちゃんが驚きの一言を僕に言ってきた。

「それはそーと、きよ君ってさ！綾ちゃんの事が好きなんですよー！？」

(……………!!!????????えっ????うつそ!!!???)
「なんでそんな事知ってるの???誰にも言ったことない僕の好きな女子の名前!!!なんで理沙子ちゃんは知っているのだ! !???)

焦った僕は、早口みたいなあたふた声で答えを返す。

「なっ……なに言っただよ理沙子ちゃん!!!なっなんでそんなこと……………」

はればれのあわて方。はずかしすぎて耳まで赤くなってきた。

「へっへっ。きよ君みてればわかるわよっ。そんなの」

(……………なんでわかるんだ???僕はそんなにも綾ちゃんが好きなことを表に出していたのか!?)

・僕があわてたままもごしている、続けて理沙子ちゃんが……

「じゃあ、きよ君が綾ちゃんを好きな事は黙っていてあげるから、何とか私とのぶ君の事をくつつけてよね。それじゃあ！また明日！」

・・・・・・と完璧な捨て台詞で帰っていった。

（・・・・・・ばれていたのか、僕が綾ちゃんの事を好きな事・・・・・・理沙子ちゃんが気付くって事は・・・・・・まさか綾ちゃんも気付いている??・・・・・・そんな事はないよな・・・・・・）

1人になった帰り道。夕日に変わってしまった太陽を横に、深呼吸をしながら心を落ち着かせた。やっと心のどきどきが消えてきたので、もう一度ゆっくりとさっきの理沙子ちゃんとのやり取りを思い出しはじめた。

考えれば考えるほど心配になってくる。その「綾ちゃんの事が好き」だというばれればれの態度・・・・・・いったいどんな態度だったんだろう・・・・・・

（よし！！・・・・・・まず明日からは綾ちゃんの事をあまり見ないようにしよう・・・・・・）

どんな態度が悪かったのかがわからない僕は、とりあえず「綾ちゃんを見つめてしまう」という行動をとらない事を決めた。

僕は、綾ちゃんの事が好きな事を絶対に誰にもばれなくなかった。誰かに「学校で好きな子いるんでしょ??」とか「誰が好きなの??」とか聞かれても、僕は必ず「好きな子はいないよ！」と答えていた。なぜなら、それははずかしがりやだから。自分が好きな子を他の誰かが知ってしまったら・・・・・・もしかしたら僕は不登校に

なってしまうかもしれない。

そんないろんなことを考えながら歩いていると、家までの距離がすごく短く感じられた。本当に明日からの態度には気をつけないと・・・
・・なんだか学校へ行くのがすごく辛く、はずかしく感じた。

9、避難訓練でのアクシデント

今日もいつもの通学路を歩く。前を歩く2年生の女の子、今日は赤い傘を持っている。予報では午後に雨が降ると言っていた。でもなんだか空を見ると天気が良くて雨なんか降らなそうなのがした。何もしゃべらないで歩く通学路。今日も頭ではいろんなことを考える。

先週、理沙子ちゃんに・・・「綾ちゃんの事が好きなんですよ？」と言われた。それから、この一週間は綾ちゃんを意識しないようにする事に全力で頑張った。それでもたまに見てしまいう綾ちゃんの顔。やっぱりまったく意識しないのは難しいみたいだ。

(あゝあ・・・気にしないなんて無理だよ。綾ちゃんも僕の事を好きでいてくれればいいのにな・・・両思いになりたいな・・・)

意識をしないように・・・意識をしないように・・・そう考えていると、逆にその綾ちゃんの事を考えすぎてしまう。なんだか空回りしているみたいな不思議な毎日を送っていた。

あれから、理沙子ちゃんにのぶ君の事を言われたことはなかった。でも、理沙子ちゃんがのぶ君の事を好きだと知ってからそういう目で理沙子ちゃんを見ていると、なんだかのぶ君の事をすごく気にしているのが良くわかる。やっぱりみんな好きな子を見ていたり、近くにいたりそんな動きをしているみたいだ。僕も今まではそんな風に見られていたのかも・・・そう考えるとものすごくはずかしく思えてくる。僕はあの日から・・・

（綾ちゃんを見てしまうのはしょうがないけど、なるべく近くに行ったり、しゃべりかけたりはしないようにしていこう……）

と心に決めていた。

学校に着いた。いつも通りに始まった今日の通学路。でも今日は、そのいつもとは違う大切な大イベントがあった。それは……避難訓練。

勉強の授業を思いっきりつぶしてみんなでわいわい楽しいイベントだ。避難訓練は3時間目。避難訓練の時間が楽しみな僕は、その時間が来るのをドキドキしながら待ち続けた。

「はい！次の授業は避難訓練です。いいですか！？予定では後20分後に地震が起きて、給食センターから火災が発生します。心して待つように……その前に、地震が発生してからの動きと避難経路を説明します。いいですか……まず……」

ついに始まった避難訓練。先生の話によると……まずアナウンスによる地震が発生。「ただいま震度5の地震が発生いたしました」そしたらすぐに机の下に隠れる。その後、非常ベルがなって、もう一度アナウンス。「ただいま、給食センターより火災が発生いたしました……」それを聞いたら廊下に整列。先生の指示にしたがつて校庭に行く。この時だけは上履きのまま校庭まで行ってもいいみたいだ。なんだかドキドキの大イベント。

（どーしよー楽しみだな……）

時間が近づいてきて、何だか変な緊張までしてきた。

「はい、そろそろ地震が発生しますからね……いいですか……」

・・」

先生の言葉を聞いてみんなもなんだかそわそわしてきた。やっぱりみんなも避難訓練が楽しみみたいだ。そしてついに、少しざわついていた教室に、避難訓練の始まりを告げるアナウンスが流れ始めた。

「ただいま震度5の地震が発生いたしました！・・・ただいま震度5の地震が・・・」

「地震が発生しましたよ！！！！早く机の下に隠れて！！」

アナウンスが流れると、すぐに先生がみんなに向かって叫んだ。それを聞いたたけちゃんは・・・

「うわうわうわあああゝどーしよおおゝ！！！！おつかあさゝん！！！！」

興奮しながら、また変なダンスをしてみんなを笑わしている。

「こら！早く隠れなさい！！」

先生が出席簿でたけちゃんの頭を軽くたたいた。机の下に隠れるみんな、いつもとは違う不思議な光景だ。机の下に隠れて周りを見てみると、いろんな消しゴムのかすとかえんぴつ、ゴミなどが散らばっていた。

いつも思っていたのが飯田君の席。その飯田君の席の周りにだけ、なぜだかいろんなゴミが落ちている。机の周りを見るだけで、その人の性格とかまでわかってしまう・・・ジリジリジリジリイイ・・・

「ただいま・・・給食センターより火災が発生いたしました・・・
ただいま給食センターより・・・」

「うわうわうわああああ～今度は火事だあああ！！！！おしつこ
もらしちゃうよっおおおお！！！！」

股に手を当てて叫ぶたけちゃんを見てみんな大笑いだ。笑いながら
僕達はすぐに机の下を飛び出して、廊下に整列をした。廊下に出る
とびつくり・・・廊下は、本物っぽい火事の煙でいっぱいにな
っていた。

（なんだこの煙は・・・先生達も気合が入っているな・・・
）

廊下には小さな缶詰みたいなのがいっぱい置いてあった。先生達が
準備していた煙を出す特別な道具。そこから吹き出すものすごい量
の煙。

「はい！！移動しますよ！！準備はいいかな！！？」

そんな僕達の驚きを無視して、忙しそうに先生がみんなに言った。
校庭への移動開始だ！！

「う・・・う・・・う・・・わ・・・あ・・・あ・・・あ・・・た
く・・・すけく・・・てくれえ・・・え・・・え・・・」

たけちゃんがスローモーションになった振りをして、ものすごいゆ
っくりと走る動きをしている。何が何でもみんなの事を笑わせたい
みたいだ。

「いいかげんにしなよ！たけちゃん！！」

横でのぶ君がまじめに怒った。やっぱりしっかりしていてかつこいのぶ君。あれあれ！！？きれいに2列で並んでいたのに、いつの間にか理沙子ちゃんがそののぶ君の横に引っ付いて肩を並べている。

「そうよね！のぶ君。早くいこ！！」

そう言って理沙子ちゃんは僕の方をちらつと見て、目で合図をした。
・・・

この間の帰り道での約束・・・「のぶ君と理沙子ちゃんをうまくいくようにさせる」それを今実行しなさい！！というちら目の合図だ。それを見た僕は思い出したように・・・

「あつ・・・ああなのぶ君、そうだよ！！はっ早く行ったほうがいいよ・・・ほら！理沙子ちゃんと一緒に・・・」

と焦って少し強引気味な台詞をのぶ君に言ってしまった。それを聞いたのぶ君は・・・

「え？？うんでも・・・列乱れちゃってるよ！列を作り直さないと！理沙子ちゃん！早く先行って自分の場所に戻りなよ！」

と理沙子ちゃんを前に押していった。のぶ君に押される理沙子ちゃんは・・・

「あ・・・そっそうよね・・・ごめん先行くね！のぶ君・・・」

と言うと僕に（何やってんのよ、きよ君！）という冷たい目を送りながら、先に進んでいった。

結局離れ離れにされた理沙子ちゃん。力になれなかった僕。せつかく理沙子ちゃんが僕の事を頼りにしてくれたのに・・・ほんとに情けない。

それにしても、理沙子ちゃんはどれだけのぶ君を好きなのか・・・はずかしさもなく、自分からそのぶ君に近づいていった。なんだからそんな行動を堂々とできる理沙子ちゃんがすごくうらやましかった。

（僕にはあんな事はできないな・・・綾ちゃんに近づいていつて肩をくつつけるなんて・・・うわっ何を想像しているんだ！！はっはっはっかしい！！）

変な想像をしてテレながら両手をばたばたさせるようにその妄想を消す僕。そんな僕が妄想から現実に戻ると、並んでいた列はもう乱れまくっていて、どこに誰がいるのかもわからないくらいになっていた。しかもものすごい煙の量。進めば進むほど煙が多くなっている・・・もうここは、前がまったく見えないくらいになっている。

（ここまでやってほんとにいいの！？？）

僕はあまりにもすごい煙を見て少し心配になってきた。すると・・・

「ちよっ・・・ちよつとみんな大丈夫か！！？けっ怪我するなよ！！！」

遠くで先生がその煙に焦って、みんなを探し回っているのが目に入った。先生があわてるほど危険な状態。そんな中、前に進むと・・・

(・・・うわっなんだよ！ここは階段じゃないか！！)

すごすぎる煙で、まったく気付かなかった階段。もう足元に何があるかもまったくわからない。

(いくらなんでもすごすぎるよ！！！！？？？ほんとに大丈夫？？？・・・)

僕がそう思ったその時。

「きゃあああ・・・」

(・・・！！？この声は・・・綾ちゃん！！！)

横でした綾ちゃんの声に振り向くと、煙で前が見えなくなって階段で転んでしまっている綾ちゃんがそこにいた。あわてる僕。とっさに・・・ほんとにとっさに何も考えず、その綾ちゃんを起こしてあげている僕がいた。自分の行動に自分で焦る。はずかしがりやのこの僕が、綾ちゃんにそんな事をしているのだ！しかも僕はなんとその綾ちゃんと手と手をつないで起こしてあげていた！

(・・・???うつ・・・うわあゝはずかしい・・・
なっなにやってたんだよ僕は・・・)

「あつあああ・・・だっ大丈夫！！???綾ちゃん」

僕は赤くなりながら裏返りそんな声で綾ちゃんにしゃべりかけた。
すると……

「あつ……うん、大丈夫……」

……と綾ちゃんは言って、一瞬だけ僕を見るとテレながら先に階段を下りていってしまった。

（うわああ〜どーしょー！なんてバカな事をしちゃったんだ！
！あの綾ちゃんの手を握ってしまった！！はずかしいはずかしい
はずかしい！！！！！！！！ばかばかばかばか！！！！し
かもやさしくかつこいい台詞が言えればいいのに、あわてて言った・
・「だつ大丈夫！！？？」の台詞。ぜんぜんかつこよくもな
んともないよー！！！！うわああ〜今の行動、みんなに見られてない
かな……）

僕は心の中でその全部をはずかしがった。そして何よりも、はずかしがりやの僕はその出来事を他のみんなに見られていないかがすごく気になっていた。校庭に着いた僕。校庭ではもう、みんながきれいなはじめの2列を作っている。すると僕を見つけた五十嵐さんが・
・・

「あつ！きよ君！！」

いきなり大声の声かけ！

（もしかしたら、さっきのはずかしい出来事を五十嵐さんは見ていたのかもしれない……）

僕は妙にその五十嵐さんの顔が何かを知っているような・・・そんな表情に見えた。そんな怪しい笑顔で僕に詰め寄ってくる五十嵐さん。僕はあわてて五十嵐さんに言った。

「へっ！！・・・なっ・・・なに！！??」

悪いことをした後みたいになにか不自然なしゃべり方だ。それを聞いた五十嵐さんが続けて僕に言ってきた。

「もっ！！きよ君、どこいたのよ！！途中からどこにも居なかったから心配したじゃない！！さがしたのよおっ！！」

（へっ・・・なんだそういうことか・・・よかった、五十嵐さんには見られていなかったみたいだ・・・）

ほっと一安心。そして他のみんなを見てみると・・・みんなもいつも通りの普通の会話をしている。

（・・・ふっ助かった・・・どうやら誰にも見られていないみたいだぞ・・・）

僕はいろんなみんなをきよきよ見ながら、心の底から安心感を味わった。

校長先生の話と、消防署の人の話が始まった。けどもうそんな話はどうでもよかった。ただたださっき起こった綾ちゃんと僕との出来事を、頭の中で繰り返し思い返した。階段をおりる僕。横で転ぶ綾ちゃん。手を握って起こしてあげる僕・・・立ち去る綾ちゃん・・・何回思い出してもはずかしい・・・そんな事を考えてる僕は、いつもより何度もちらちらと綾ちゃんを見てしま

っていた。

（さっきの事、綾ちゃんはどう思ってるんだろう……？）

何度も何度も綾ちゃんを見てみると、なんだか綾ちゃんもこつちをちらちら気にしているように感じる。たまに目と目が合う僕と綾ちゃん。

今までは僕が綾ちゃんを見るだけだった。ただただいつも綾ちゃんの横顔を見るだけの毎日だった。けども今日は違う。綾ちゃんもこつちを意識してくれている。いい風に考えれば、綾ちゃんが僕に興味をもってくれているという事。なんだか少し進歩したような……発展したようなそんな気がした。

はずかしいはずかしいと思っていたさっきの行動も、なんだか今では正しい行動だったと思える。

（……よくやったぞ、清正！！今までで一番綾ちゃんと大接近したぞ！！そのままがんばれ！清正！！）

……僕は心の中で、積極的だった自分を興奮しながらほめ続けた。

10、腕相撲大会

．．．．．「ねー．．．．．ね
ー清正君．．．．．」

（綾ちゃんの手．．．．．すごく柔らかかったな．．．．．
．．．．．もう一度あの時に時間を戻せたらな．．．．．）

「ねー清正君！！聞ってる！清正君？！」

（．．．．．はっ！！）

驚いて横を見るとメガネの恵美ちゃんが、大好きな小説を開きながら少し怒り顔で僕を見ていた。

今は昼休み。僕は静かな暖かい図書室で、ボーッと避難訓練での綾ちゃんとの出来事を思い出していた。

「清正君どうしたの！？本も開かないでボーッとして．．．．」

恵美ちゃんがそんな僕を見て不思議そうに言った。続けて恵美ちゃんが．．．．

「私のさっきの話聞いてた？．．．」

．．．．．そう聞かれた僕は．．．．．

「えっ・・・なんだっけ!？」

避難訓練の事を思い出していた僕は、その恵美ちゃんの話をもったく聞いていなかった。そんな「？」を飛ばしながら首をかしげる僕を見て、恵美ちゃんが強めの言い方で言ってきた。

「さっき話した腕相撲大会の話だよ!私のクラスで一番腕相撲が強かったのは、雄大君だったって話。」

(・・・えっ・・・腕相撲?)

苦手なことが多い僕のたった一つの特技、それが腕相撲。隣のクラスの恵美ちゃん。そのクラスでは「みんなの時間」を使って腕相撲大会をやったみたいだ。

「私のクラスの担任の小島先生と、清正君のクラスの担任の佐藤先生とすごく仲がいいよね?だからもしかしたら清正君のクラスの『みんなの時間』でも腕相撲大会やるかもしれないよ」

次の授業がそのみんなの時間。

「みんなの時間」という時間は、いつもは勉強でできない大切な事をする、週1回用意された特別な時間だ。学級委員を決めたり、席替えをしたり・・・いろんな事をする。勉強じゃない楽しい時間。その時間を使って、今日は腕相撲大会をやるかもしれない・・・得意な腕相撲。いつもはかつこ悪くて、はずかしい失敗で目立ってしまっ僕だけど、もし腕相撲大会をやったとしたら、かつこよく目立つことができるかもしれない。避難訓練での前向きな行動。今日の僕は、いつもよりも自信があった。そんな僕は、もしかしたらやるかもしれない腕相撲大会だけど、なんだかそのみんなの時間がもの

すごく楽しみになってきた。

「はい！！今日のみんなの時間は・・・・・・・・腕相撲大会です！！！！！！！！」

（やったああああ！！予想通りの腕相撲大会！！）

授業がはじまるチャイムと一緒に言った先生の一言に、僕は小さなガッツポーズをとった。

ルールは簡単、トーナメント制だ。2人ずつ順番に黒板の前にある先生の机に行つて、その机をはさんで勝負がスタート。勝負をしている机の裏にはそのトーナメント表が書かれている。そして勝ち上がると先生がそのトーナメント表に、赤いチョークで線を引いていく。

（・・・・・・・・よしっ！見せ所だぞ！！・・・・・・・・）

僕はその順番を心待ちにした。

いろんな友達がいろんな子と対決をしていく。負けて悔しがる子、勝つてガッツポーズを決める子、その時だけはその2人だけにみんなが注目をする。僕にとっては1番の見せ場だ。そしてついに僕の順番が回ってきた。1回目の勝負。先生の机の前まで行つて、片腕を置いて準備をする・・・・・・・・

「・・・・・・・・レディー・・・・・・・・ゴー！！」

先生の合図で勝負が開始。始まってすぐに、僕は相手を簡単にぶつ倒した。

「うおお……すげえ……」

いつもは笑わしているだけのたけちゃんが、僕の腕相撲を見てめずらしく素直な驚きの言葉を言った。そんなたけちゃんを見て僕は思った。

（これはいい所までいけそうだぞ……）

僕の得意な腕相撲、僕の「勝てる」という自信はその一回戦でまた大きく膨らんだ。

腕相撲大会はどんどん進み、さっき僕の強さに驚いていたたけちゃんの順番が回ってきた。相手は不幸にもあの五十嵐さん。

「いくわよおお!! たけちゃん!!」

どんどん敗れていく女子達。そんな中、五十嵐さんだけは順調すぎる勝ち上がりを見せていた。

「ひよええええ……五十嵐かよ……きついなあ……」

腕をまくって気合を入れる五十嵐さんを見ながら、たけちゃんは弱気な発言をした。たけちゃんも腕相撲が弱いわけじゃない。かなりの力を持っている。そんなたけちゃんだけど……

「いててててて! まいった! まいりました!!」

……五十嵐さんの圧勝で勝負が決まった。

(・・・やばい・・・)

黒板のトーナメント表を見ると、次の僕の対戦相手は、なんとその五十嵐さんだ。あの強さを見ると、優勝するには必ず戦わなければならない相手。それが早いか遅いかの違いだ。深呼吸をして冷静に、焦らずその対戦を待った。

どんどん進んでいく腕相撲大会。強いのはやっぱり優勝候補ナンバーワンののぶ君。なんでもできるのぶ君は、うまさすぎる試合運びで順調に勝ち上がった。そしてもう1人の優勝候補、太っている飯田君。飯田君はどんなに弱い相手でも、太い腕を使って容赦なくねじ倒す。あっさり負けてしまったのがデブヤセコンビのもう1人、やせの山田君。無口で目立たない山田君も、なぜか飯田君の試合になるとか細い力のない大声で飯田君を応援していた。

進んでいく腕相撲大会。黒板のトーナメント表は、もうかなり上のほうまで来ていた。そのトーナメント表を見ながら、先生のうれしそうな一言。

「さあ！！次は大一番だね！どっちが勝つのかな？」

ついに五十嵐さんとの対決の時が来た。もう一度深呼吸をする僕。

「・・・ふ・・・」

そして黒板の前に行って、その五十嵐さんを見上げる。相変わらず僕より大きいその体。いつも僕はその五十嵐さんにバカにされて・・・いじめられて・・・辛い毎日を送っている。僕は心の中で・・・

(・・・今日は負けないぞ・・・)

と言いつけた。そしてその五十嵐さんの手を握る。握ってビックリ、あの綾ちゃんの暖かくて柔らかかった避難訓練の時の手とは違って、ごつつくて大きな男らしい手。握るだけでその強さがビシビシ伝わってくる。

「準備はいいかな？・・・レディー・・・」
「ゴー!!」

先生の合図、勝負が始まった!!

「ふん!!」

五十嵐さんの男勝りの太い声! その声とともに勢いよく僕の手を押し倒しに来た!・・・そんな五十嵐さんの力を手で感じて・・・僕は思った。

(・・・僕は腕相撲が本当に強いんだ・・・)

心で思う本音の気持ち。あんなに強かった五十嵐さんも、やっぱりこんなもんだったのだ・・・正直にその五十嵐さんの力が、僕には弱弱しく感じられた。僕は余裕の笑みを見せながら、その五十嵐さんを簡単にねじふせた!!

「えっ・・・えっ!!!!!!!!」

教室に響き渡る驚きの声。みんな僕の余裕すぎる勝ちを見て驚きの・・・尊敬の声を上げた。

(・・・・・・いける。今ならいける！)

僕の自信は確かなものになった。

(このクラスの優勝は必ず僕がものにしてやる！！今日こそはいつものかつこ悪い目立ち方と違って、かつこよく目立って見せる！！)

いつもより堂々とした歩き方で歩いて　どんつ　と自分の席に座る。そして腕を組んで、目を閉じて、また自分の対戦を待つ。あの飯田君やのぶ君もそんな僕を見て、目を大きく丸くさせた。

それでもこの2人、飯田君とのぶ君は間違いなくものすごい力を持っているはず。肩を大きく回す飯田君。緊張をしているみたいだ。それもそのはず、次の飯田君の対戦相手は・・・・・・もう1人の優勝候補、のぶ君だ。2人の直接対決！！机をはさんで両側に立つ2人・・・・まわりではいろんな友達がざわざわざわとどっちが勝つかを予想していた。そこで先生の一言・・・・

「レディー・・・・・・」

・・・・・・さっきまで騒いでいた教室のみんなが一気に静まり返る。ついに始まる、飯田君とのぶ君の直接対決。その結末にみんなそろって息をのんだ・・・・

「・・・・・・ゴー！！！！！！」

勝負が始まった！・・・・・・ビシッ・・・・・・と止まる2人の動き。震えてどっちにも傾かない。名勝負だ！！じりじりじり時間がすぎる。何も起こらない数十秒間。長すぎるその時間を動かしたの

は・・・・・・・・のぶ君だった。

「う・・・・・・・・おおおお・・・・・・・・！」

ゆっくり・・・・・・・・ゆっくりとその手が傾き始める。あの飯田君が押されているのだ。

「がつ・・・・・・・・がんばれ！！いいだく〜ん！！！」

静かな教室に、飯田君の親友、山田君からの心のこもった応援が響いた！それを聞いた飯田君が踏ん張りながら一言・・・・

「くつ・・・・・・・・くそおお！！！！！」

押し戻そうと粘っていた飯田君だったけど、一気に力が抜けてのぶ君に負けてしまった。

「おっおー！！！！！！！」

教室に響き渡るみんなの声。これでのぶ君は決勝進出決定だ！！

「よっしやああー！！」

のぶ君がかつこよくガッツポーズをとった。そんなのぶ君を女子達は憧れの目で見つめていた・・・・

相変わらずかつこいい親友ののぶ君。1番がのぶ君で2番が僕。そんな関係がずっと続いていた。僕はいつもそんなのぶ君をうらやましく思っていた。憧れ続けていた。でも今日の僕は今までの僕とは違う・・・・・・・・

・・・うらやましいというよりはむかつく・・・

いつも僕の心の中に隠れていた本音の気持ち。それは・・・

（なんで僕はのぶ君に勝てないんだ？・・・）

僕はそんな気持ちを持ちながら、負けてもいつも笑顔でへらへらしていた。それはのぶ君に負けて当たり前だと思っていたからだ。だから笑ってごまかす事しかできないでいた。でも今は腕相撲。僕のたった一つだけ得意な腕相撲だ。ついに・・・ついにのぶ君に勝てるチャンスがめぐってきたのだ。ここだけは僕が目立ちたい。僕がヒーローになりたい。絶対にのぶ君に勝ちたい！かつこよくポーズを決めるのぶ君を見て、僕は心の底からむかついた。

僕の準決勝は簡単に終わった。もちろん僕の圧勝。僕にはもうのぶ君しか映っていなかった。いつも1番ののぶ君、負けてしまう僕。そんな2人が今決勝の舞台に上がった。間違いなく、のぶ君も今までにない僕に対する恐さを感じているはずだ！！

（腕相撲じゃなきゃ勝てるのに・・・今日は負けてしまうかも・・・）

そんな気持ちを持っているはずだ！一言もしやべらず、そののぶ君と目と目をかわす。いつもは仲良く笑顔の2人、でもこの時の2人にはまったく笑顔がなかった。かわした目と目は睨み合う目。完全に敵。対決の机を2人ではさむ。仲のいいのぶ君・・・僕の親友だ。ずっと心の中に持っていたその親友とは違うもう1つののぶ君

の存在……

……ライバル……

一瞬目を閉じて大きく深呼吸をした。そしてゆっくりとそのぶ君の手を握る。何回も握りなおす手、自分の一番いい握り方をしたいからだ。

（……絶対に負けられない……今回だけは……今回だけは……）

心臓の音が、何もしていないのに聞こえてくる……

「さ……いくよ……レディー……」

「

……もう待ったなし。周りの友達がいろんな言葉で応援しているけど、そんな声はもう僕には聞こえていなかった……

「……ゴー!!!!!!!!!!!!!!」

運命の勝負が始まった。

11、腕相撲大会決勝戦

ビシッッッ!!

固まって動かない2人の手。

「くっ……くっ……くそおお!!」

さつき、強敵の五十嵐さんを簡単に倒した僕は、圧勝を狙って最初から全力でのぶ君に挑んだ。それなのに、まったく動かないのぶ君の腕。震える2人、力はまったく互角だ。

「くっ……くっ……くっ……んん!!」

……苦しむのぶ君。この僕があなのぶ君を苦しめているのだ。僕にとってははじめは、クラスで1番とみんなの注目が目的だった。

でも今はもうそんな事はどうでもいい。目的は1つ。

のぶ君に勝つ……

……動きが固まってからどれくらいの時間がたったのか……僕にはまだ余力が残っていた。腕相撲で勝つコツ。「相手の体力を奪う!」それだ。この余力を使えば必ずのぶ君に勝てる!!僕はその力を使うタイミングをずっと待ち続けた。

(……よし!今しかない。)

と思ったその時だった……

「「おおおおのおおおお!!!!」」

のぶ君の力が、一気に僕を苦しめ始める。

「えっ……」

焦る僕。そうなのだ。のぶ君もまた、体力を奪う作戦を使っている。まだ力を残していたのだ。

「ちよっ……ちよっ……ちよっ……まっ……て……」
「……!?」

一気に押される僕。やばい……手の甲が、机につくぎりぎりまで来てしまった。

（やっぱり……やっぱり僕はだめ男なのか……
……いつまでたってものぶ君に勝てないのか……）

勝負をあきらめかけたその時!!

今まで耳に入っていなかったみんなの応援。のぶ君の事や僕の事をみんなが応援していた。その飛び交う応援の中から、聞いた事があるきれいな声が僕に聞こえてきた……

「きよ君……がんばって!」

……間違い……綾ちゃんの声だ……

……えっ……

いつもかつこよく勝利するのぶ君。そののぶ君を真似して、僕は自分なりのかつこいい言い方と顔でそのガッツポーズをとった。

そんな僕にみんなからの拍手がいつまでも……いつまでも降り注いだ。

12、冷たいのぶ君との一斉下校

「ふああゝ・・・・・・・・・・」

腕相撲大会で疲れた僕は、校庭に並びながら大きなあくびをした。

今日は一斉下校。朝いつも学校に向かう通学班、それと同じメンバーで家まで帰る一斉下校だ。あの腕相撲大会が終わってから、間違いなく友達の僕に対する態度が変わった。いつもはあまりしゃべりかけてこない友達も、僕にどんどん話しかけてくる。なんだかヒーローになったみたいで気持ちよかった。

そんな友達に囲まれる僕に、のぶ君は冷たい視線を送ってきた。少しそれが気になったけど、気にしないふりをしてみんなのいろんな質問に答え続けた。

一斉下校の今、校庭では朝の通学班の一行を作っている。先頭はのぶ君。一番後ろが僕。僕がみんな揃った事を確認して、のぶ君にいつも通りの大きな声を言った。

「のぶ君！！みんな揃ったよ・・・・・・・・」

その声を聞いて　ちらつ　と僕を見るのぶ君。その目が・・・・・・・・いつもののぶ君とは違った。ものすごく冷たい目・・・・・・・・友達を見る目じゃない。そして何も言わずにまた前を見る。

（・・・・・・・・なんだか気まずいな・・・・・・・・）

そんなのぶ君の態度を見て僕は思った。

小さい頃から親友ののぶ君。僕はそののぶ君と一度もけんかをした事がない。別に今もけんかをしたわけじゃない。だけど……なんだか気まずい雰囲気になっていた。

いつも1番ののぶ君。それを見ながら僕は「……すごいのぶ君。なんでそんなにすごいのか？」と口癖のように笑顔で言っていた。もしかしたら僕達2人はそんなやりとりでバランスをとっていたのかもしれない。そのバランスが崩れてしまった腕相撲大会。むきになっていた僕。そのせいで2人の仲がおかしくなり始めている。

「いくよ!! みんな!! ばらばらにならないようにね!!」

いつも通りのリーダーシップで、のぶ君が言った。

みんなで歩き始めた下校道。この一斉下校も朝の通学とまったく同じ。前ではのぶ君達が楽しそうに会話をしている。一番後ろの僕は下を向いたままいろんな事を考えて1人で歩く……

今日一日で何かが変わったと思った。いつもの僕とは違う新しい自分になったと感じた。でも今、またいつもと変わらずみんなに相手をされない帰り道を歩いている。前では人気があるのぶ君が、みんなと楽しそうに会話をしている。

「……あ……」

ため息をついた。

結局あの腕相撲大会なんて一つのイベント、一瞬みんなが僕に注目しただけだ。変わった事といたら、のぶ君が僕に冷たくなった事、

それだけ。2人の仲が崩れてしまった事だけなのだ。

（・・・あああゝ・・・なんで僕はあんなにむきになっていたんだろう。こんな事ならあの腕相撲大会でのぶ君に勝たなければよかった・・・）

成功だと思っていた腕相撲大会、僕はその大きな失敗に気付き始めた。

そういえば、その腕相撲大会の決勝戦で僕が負けそうになっていた時、綾ちゃんの声で「きよ君・・・がんばって！」と聞こえた気がした。その声を聞いて励まされた僕は、そののぶ君に勝つ事ができたのだ。あの声は本当に綾ちゃんだったのかな？勝負に夢中になっていた僕は、疑いながらあの声を聞いていた。もしかしたら幻？でも確かに聞こえた気もする。本人に聞くのは恥ずかしいし・・・

避難訓練で転んだ綾ちゃん。僕はその綾ちゃんの手を握り起こしてあげた。はずかしかったあの行動。でもその行動のおかげで、もしかしたら綾ちゃんが僕に興味を持ち始めてくれたのかもしれない。だとしたらあの僕を応援した声も、本当に綾ちゃんの声だったということになる。腕相撲大会の失敗を思い出すと落ち込んでしまうと思った僕は、綾ちゃんとの避難訓練を思い出しながら前向きに帰り道を歩き続けた。

そんな事を考えながら無口に歩いていると、いつの間にかもう、僕の家の前まで着いてしまった。すると、ずっと前を見ていたのぶ君が後ろを振り返って僕の方をちらっと見た。またあの冷たい目だ。

「じゃっ・・・じゃあね・・・のぶ君・・・」

なんだか言いにくかったその言葉を、僕は頑張っ
ていつも通りに言
った。それを聞いてものぶ君は何も言わず、また前を見てさっさと
自分の家に入っ
ていった。

（・・・大丈夫・・・今日だけだ・・・今日だけ仲が悪いだけ
だ・・・）

僕はあまりにも今までと変わってしまったたのぶ君の態度を見て、そ
のいやなイメージを振り払うように心の中で言い続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0627y/>

思い出が見える丘

2011年11月21日18時07分発行